

①⑥ 『水鷄くいなも我も』

昼飯を盗まれたミチは、遠ざかる鳶をにつこり微笑んで見送った。お腹を空かしているのは私だけではないお前も同じ、そう思うと竹の皮の包みをしつかり掴んで飛び去る鳶が、とおしく思えた。

一度沖に向かつて飛んでいた鳶は、やがて大きく旋回するとミチの方に戻って来て、頭上をゆっくりと後方の松林を越えて姿を消した。

その姿を見送りながら、「ごめんなさい」と謝りに来たのか、それとも「ありがとう」といったのかしら、とミチは考えた。そんなことを想像していると、また、ミチの頬がほころんで笑顔が浮かんで来るのだった。

気を取り直してミチは包みを探り、おとよに渡された干飯を取り出した。竹皮の一枚を筒の代わりに干飯をひとすくい盛り、竹筒の水をかけた。若狭湾の青く澄んだ水の打ち返しを眺めていけば、やがてカリカリに乾いた米粒がやわらかくふやけて食べ易くなる。

翌日、ミチは加賀との境に有る吉崎に向かっていた。蓮如上人の旧跡が有るところである。此処には東、西、両本願寺の分院が有ると聞いている。今夜はどちらかの宿坊にお世話になるつもりだった。

北方湖が見え始め、陽はまだ目の高さに残っているものの、穏やかな卯月の空の色が、夕暮れが近いことを告げていた。この先の関所を越えれば吉崎は近いはず。

思っていたよりも今日は随分早く休むことが出来そうなので、ミチの気持ちも足取りも軽かった。

関所に近づいてミチは小首を傾げた。関所の扉が閉じられているのだ。

陽はまだ高い。陽の高さからすれば時刻はまだ七つ半を少し回ったくらいだろう。何故こんなに早くから扉を閉めているのだろうか、とミチはいぶかしく思いながら関所に近づいた。格子の向こうに人影が見える。ミチは扉をとんとん、と叩いてみた。振り向いた関所も近づいて

「今日は通すことができぬ。明日出直すがよい。」と言いつ捨てると引き返そうとした。

目指す吉崎はもうすぐそこ、それに、今から引き返せと言われても当てもない。

ミチはもう一度、とんとん、と扉を叩き

「雲水の身です。どうぞお通し下さい。」と頼んでみた。

「雲水であろうと何であろうと、今日は通せぬ。黙って引き返せ！」と半ば睨みつける顔を向け、荒い言葉を投げつける。と、さっさと引き返してしまった。

ミチはとんとん困り果てた。もう一度、すぎる思いで扉を叩いてみた。だが、詰所からは誰も出て来る気配はなかった。

もう一度、もう一度、ミチは扉を叩いた。だけど無駄だった。

さてどうしたものか、と草の茂みに腰を降ろし思案を巡らせてみたが、妙案は浮かばない。浮かんで来たのは新しい一句だった。

『関の戸を叩ては鳴水鶏も我も』

とんとんと戸を叩く音に似ている水鶏の鳴き声に今の気持ちを重ねてみたが、そうすると余計に扉の前でなす術無く途方に暮れている我が身が情けなく思えて来た。

そうやって、何のてだても見つからずただ草むらに座り込んでいる間にも、時は構わず過ぎてゆく。

梢を透かして見えていた空の明るみが消えて、いつの間にか星がまたたいていた。

格子の向こうの二つのかがり火がやけに明るい。時折その明かりの中に人の姿が見えるが、すぐにどこかえ消えてしまう。もはやミチには扉を叩く気持ちも失せていた。

長府の家を出る時に、下男の五助に

「まだ暗ろうございます。せめて小月の宿まで送らせて下さい。」と言われ

「暗闇を恐れるようでは修業になりません」と断ったことを思い出していた。だけど今は、暗闇をいとう気持ちで一杯だった。

父や母はどうしているだろう。多門次も五助も元気かしら。

今日まで、一年近くも家を離れて暮らし、今ほど家族を強く思い出したことはなかった。それほど今のミチは弱気になっていた。頬をひとすじ涙が伝った。

その時、関所の扉が僅かに開いた。そこから漏れたかがりの光が、草むらにうづくまるミチを浮かび上がらせた。

「尼さん！さ、今の内に通りなさい。早く！」と内側から声をかけた人影が有る。

見ると若い関もりがしきりに手招きをしている。

「関所破りの情報が入り、命令で早くから扉を締めましたが、今しがた動きが有り、皆、国ざかいに向かいました。さ、さ、早く、早く、急いで！」